

聞き手を意識しながら、問いをもち、話す力を高める子ども

— 中学1年「ポスターセッション」の実践から —

1 単元のねらい

資料をもとに聞き手に分かりやすく説明できるように、話す構成を工夫したり、聞き手を意識して発表したりすることができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

以下に示すふりかえりは、小学校時のスピーチ活動を振り返ったときに生徒が書いたものである。

小学校では、あまり得意ではなかったので中学校ではがんばっていきたい。(生徒A)

このような記述から、音声言語での表現に苦手意識をもっている様子が見えてくる。一方で、中学生になり、苦手だと感じていることに挑戦したいという意欲的な気持ちをもっていることが分かる。4月に学習した「友達のことを紹介しよう」というスピーチ活動において、文字言語での構想場面では、ペアで意見交流をし、よりよい発表ができるように考える姿が見られた。反面、音声言語の発表の練習では、友達の発表を見て良いところは伝えることができるが、友達に遠慮し課題をなかなか直接に伝えられないという姿が見られた。よりより話者になりたいと気持ちが高まっている今だからこそ、それぞれの課題を率直に伝え合い話者としてより向上できるような活動を取り入れていきたい。また、スピーチ学習の取り組みにおいて、話者が聞き手意識をもって話すというところに課題が見られたので、より聞き手意識を強くもつことができる活動を取り入れる必要性を感じた。本単元を通して、話をする上で、聞き手がどういう人なのか、そして聞き手が自分の発表を聞きどう感じるのか、また疑問はもたないのかということ話し手として考える必要があるということを実感させていきたい。そうすることで、これからの発表活動のいかなる場面でも、一方方向の言語活動でなく、生徒同士が相互にかかわり合える学習が成り立ち、伝え合いを広げる生徒の姿が見られると考えた。

(2) 本単元の内容と国語科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

これまでの本校国語科の研究から「話すこと・聞くこと」の単元を設定するときに、大切な点が何点かあるということが成果として出てきた。その中の一つにその活動をする「必要感」をいかに生徒にもたせていくかが大切であることが分かった。「問いをもち、主体的に追求する姿」を出させるためには、発表活動を行う「必要感」がないと、よりわかりやすい発表をするために、より聞き手を引きつけるために、「どんな工夫ができるだろうか」とか「何が課題だろうか」といった問いをもたず、追求する様子が出てこない。そのために、今回は単元との出会わせ方を工夫した。単元の出会わせ方の工夫として、本校の総合的な学習の時間で取り組んでいる「information」の学習と関連づけて生徒に提示した。そのinformationの時間には「情報を収集すること」を学び、その情報を数学科で「資料化する学習」、国語科で「それらの情報を伝える学習」と各教科での学びを整理し、各教科に取り組んでいく内容をはっきりとさせた。

また、前述した通り生徒の実態として、中学校生活で苦手としている発表活動をがんばりたいという意欲的な思いをもっていることから、生徒が楽しく活動が出来るものを選びたいと思った。また、「聞き手のことをあまり意識していない」という課題から、聞き手とのやり取りが楽しく、複

数回行えるものを活動として選びたいと考えた。この二つのことから「ポスターセッション」を活動として選んだ。年間計画から考えると、3学期に設定してある単元であるが、これまでの研究、とくに昨年度の「パブリック・スピーキング」の実践から生徒の実態から設定することが単元を通じて問いをもつために大切だという実感があり年間計画を変更して単元を構成した。

また、ポスターセッションを選択したことでポスターを作成することになり、使ったポスターを統計資料ポスターコンクールに出品できることが分かった。ポスターの作成が国語の時間で終わるのではなく、さらに先のゴールが設定されていることで生徒の必要感がより高まり追求する姿が見られるだろうと考えた。

(3) 本単元の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

本単元では、学習対象への出会いを特に意識した。深まったりできるような手立てを設定した。単元の最初の教育実習生による例示では、実習生の「ポスターセッション」発表との出会いを通じて、ポスターセッションとはどういうものか、何に気をつけたらよいかという見通しをもち、思考を深められるようにした。そのために、3人の実習生の中で1人だけ、明らかに課題がある話者を設定し、ポスターセッションにおける表現の仕方での大切な点をクラスで共有した。

また、前回のスピーチ活動後、ふりかえりに書いた自らの音声言語での表現の課題が書かれたワークシートを見返し、発表への課題意識がつながるようにした。そして、単元を通じて、班活動でポスターを作成し、順番に同じ発表をしていくので、ポスターを作る場面や、発表の内容を考えると、友達の見解と出会うようにした。最終の発表場面では、聞き手から必ず質問を出すこと、必ずきちんと答えることを条件として発表活動を行った。事前に、ポスターを掲示し、各班の発表を想像し、質問内容を書かせた。話し手として、発表してからすぐに聞き手からの質問という内容が即時で返されることによって、自らの発表がどうだったかを振り返り、次の発表活動につながるさらなる課題意識や問いが生まれるようにした。

3 展開計画

国語の学習に入る前に、総合的な学習の時間（全2時間）、数学科（全7時間）でも学習している。つけたい力を明確にし、それぞれで学習することを整理した上で、国語科の単元に入った。国語科、総合的な学習の時間、数学科でつけたい力をこのように整理した。

(総合的な学習の時間)

- ・テーマをもとにして課題を設定することができる。
- ・設定した課題について情報を収集することができる。

(数学)

- ・アンケート結果を整理し資料を作成することができる。
- ・資料の傾向を読み取り、どんな特徴が読み取れるかを考えることができる。

(国語)

- ・数学の時間に作成した資料（事実）や読み取った特徴をまとめ、主張したい意見を文章にまとめることができる。
- ・グループの発表内容を整理し、見出しやレイアウトを考え、ポスターを作成することができる。
- ・事実と意見を分けて、聞き手の反応を見ながら話すことができる。

国語科の単元計画（全7時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇追求する子どもの姿
1	1	○単元の流れを知る ・ポスターセッションという発表形式を知る。	
2	2 3	○ポスターを作成する ・ポスターのレイアウトやキャッチフレーズについては、各班で相談し考えていく。	○どのように配置すればより分かりやすくなるか、どんなキャッチフレーズが聞き手を引きつけるかという問いを見つけている姿
3	4 5 6	○ポスターセッションの発表内容を考える ・以前の単元で行ったスピーチのふりかえりから音声言語による表現での自分の克服したい課題を決める。 ・それぞれが作ったポスターをもとに、班の友達同士で相談し、班の発表の内容を考えていく。発表の練習の場面で、聞き手として見た友達の課題を伝える。そして、どうすれば克服できるかを考えて友達に伝える。 ○第1時で考えた話者の課題から、自分達の発表をチェックし修正していく ○他の班のポスターセッションに対する質問を考え、付箋紙に書き準備をする。聞き手がどのような発表をしてくるのかを予想し、答える準備をする。 ○次時の流れを知る	○どのような発表ができるかを考えている姿 ○以前感じた自分の克服したい課題や、友達から伝えられた課題について考えている姿
4	7	○ポスターセッションを行う ・教室や廊下を使い8カ所の発表箇所を作る。 ・発表者は各班1名で時間を決めて交代する。 ・聞き手となった生徒は付せん紙をもち発表を聞いた後に質問をする。	○どのように質問に答えたらよいか、どんな伝え方をすれば良いかを考える姿

4 授業の実際

(1) 言語活動「ポスターセッション」との出会いから見通しや、重点目標をもたせるための手立て

小学校でも多くの発表活動を生徒は学習してきている。ポスターセッションに実際に取り組んだ生徒がどれくらいいるのか、またどのような発表をポスターセッションだと考えているのかを知るために、生徒に質問をした。その結果、「ポスターセッション」という言葉を使い、活動をしてきた生徒が存在した。しかし、よく聞いてみるとポスターを作成し、全体で発表をするというポスターを用いたプレゼンテーションを行っており、それをポスターセッションだと認識していた。そのため、小学校での学びを生かしつつも、ポスターセッションとは、対話形式で意見交流しながらお互いに考えを深めあうものだとすることを伝えたいと考えた。そこで、島根大学3回生が一週間実習に来る時間を使い、例示としてポスターセッションを行い生徒に出会わせた。そこで、ポスターセッションとはどういう発表形式で、どのような点が特色であり、どういう点を意識したり工夫したりすると聞き手によく伝わる発表になるのか学習の見通しをもてるようにした。授業では、3名の実習生のうち1名の発表について生徒がその話者の課題を見つけられやすくして行った。



図1：実際の実習生の発表の場面

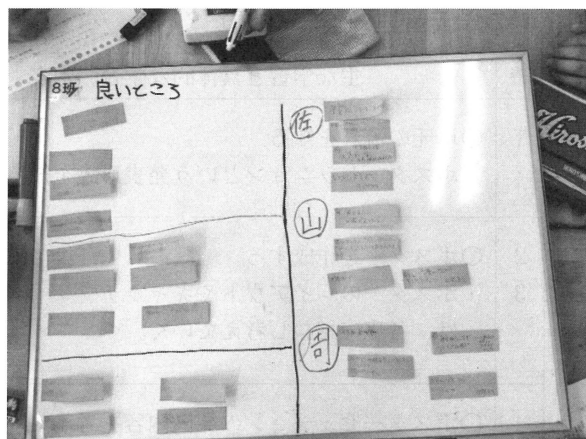


図2：実習生の発表を見て、良いところと課題を付箋にまとめたもの

図1は、実習生の発表の場面である。生徒が小学校の頃に行ったポスターを用いて、1対集団へ発表を行った。そのことにより、生徒が小学校時に行った発表に近いものとして、体験を想起させやすくし、良いところや課題を考えやすいようにした。図2は、実習生の発表を見て、良いところ真似したいところ、課題と感じられるところを生活班ごとにまとめさせたものである。これらをもとに、班ごとに表の形(図3)のワークシートにして生徒に持たせた。

この図3のワークシートは、班ごとに項目立てが異なっており、自分の班で気づいたもの以外にも当然、ポスターセッションで意識したい大切な項目がある。そこで、このワークシートを互いに見せ合い、大切だと思うものは他の班で出てきたものを書き加えても良いとし、そのための時間を設定した。

また、このワークシートは項目の最初に口を付けチェックリストとできるようにした。ただ、単元の中で、発表を考えていくうちにテーマも例とで異なってくるので、自らの発表に生きてこない項目も当然出てくる。発表の練習でお互いに見合う時のチェックリストとして活用する中で、必要でない項目については消させた。

その上で、今回のポスターセッションの活動の中で自ら発表での目標を3つ自分が持っているワークシートの項目から選ばせ、ふりかえりの視点とできるようにした。

今回の発表では、班で一枚のポスターを作成し、一人がそのポスターを用いて発表する形とした。授業では、ワークシートを手に持ちながら、友達の発表を聞き、付箋に友達の発表の課題点をチェックシートの項目を参考にしながら書き残し練習を繰り返す中で課題を改善できるようにアドバイスをする生徒の姿が見られた。

○教育実習生のポスター発表を見て

1年2組1班	よかった点	課題口改善点
	<input type="checkbox"/> 例を挙げている <input type="checkbox"/> 自分のことも話せている <input type="checkbox"/> 自分の体験を交えながら発表していた <input type="checkbox"/> 聞き手に聞いている <input type="checkbox"/> ゆっくり話していて聞き取りやすかった	<input type="checkbox"/> 目線、声がくらい <input type="checkbox"/> 棒読みだった(2) <input type="checkbox"/> 少し棒読みになっている気がしました <input type="checkbox"/> グラフがない <input type="checkbox"/> 自分のことが多すぎる
	<input type="checkbox"/> 聞き手の意見を聞いていた <input type="checkbox"/> 聞き手1人1人の顔を見ながら話していた <input type="checkbox"/> みんなに話しかけながら、発表していた <input type="checkbox"/> 声が聞こえやすかった <input type="checkbox"/> 相手の意見を活用している	<input type="checkbox"/> ポスターの色が見にくかった <input type="checkbox"/> 負傷者数のグラフは円グラフが内容にあっている気がする <input type="checkbox"/> 時間を少しオーバーしていた
	<input type="checkbox"/> ゆっくりで分かりやすい <input type="checkbox"/> 人の意見を聞いて使っている <input type="checkbox"/> ポスターが見やすい <input type="checkbox"/> イラストが分かりやすい <input type="checkbox"/> 内容が分かりやすかった <input type="checkbox"/> 割合を示している <input type="checkbox"/> グラフで示している	<input type="checkbox"/> 時間が少しすぎってしまった <input type="checkbox"/> 時間オーバーしている

図3：各班で出た意見をまとめたもの

これまでの研究より、友達から見た（友達モニター）意見は、客観的な視点から評価しているもので、自分で自分の姿を見る（自己モニター）よりも課題を発見しやすいところがあるということがわかった。ただ、その意見が相手のことを考え、温かいものであるとお互いに伸びていかな面もあることがわかった。そこで、意見交流をする前に、授業では、率直に課題を言い合うことが相手を伸ばすことにつながるということを説き、人間性の否定ではないことを強調して取り組んだ。一年生という発達段階というのものもあるだろうが比較的率直な意見が出た。

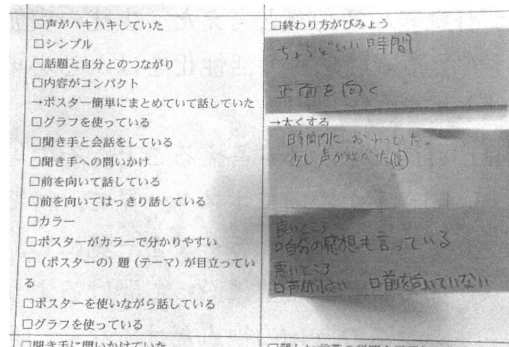


図4：発表練習後の生徒のワークシート（抜粋）

(2) 話す必要性をもたせるとともに、自らの思考を問い直すための手立て

本単元は、総合的な学習の時間、数学科の学習と関連させて取り組んだ授業である。数学科の「資料の活用」という学習で、統計を学習し、一人一人が班のテーマに基づいて資料を作成した。国語科のポスターセッションでは、その資料を用いて、貼り合わせ一枚のポスターとした。また、話者は、各班の誰もが必ず行うこととした。そうなる当然、一人一人が別々に作った資料をどう繋げて一つの発表にしていくのか考える作業が必要になる。また、友達の資料の意味を理解し、自分の資料とどう繋げていくかが、聞き手に分かりやすく伝えるための大きな鍵となっていく。図5は、お互いが作った資料を合わせて一枚のポスターとして作る場面である。誰もが話者になるので、人任せにすることができず、どのような順番で資料を使っていくのかということや、友達が作った資料のわからないところを聞き、理解しようとする中で、考えや学びが深まっていった。図6は、完成したポスターを前にして、発表の練習をする場面である。自分が考えた発表の道筋や、内容をお互いに考え吟味している場面である。自分が考えたことと友達の考えたことを合わせることでより聞き手にわかりやすい発表や聞き手を引きつける発表を目指していくことができた。

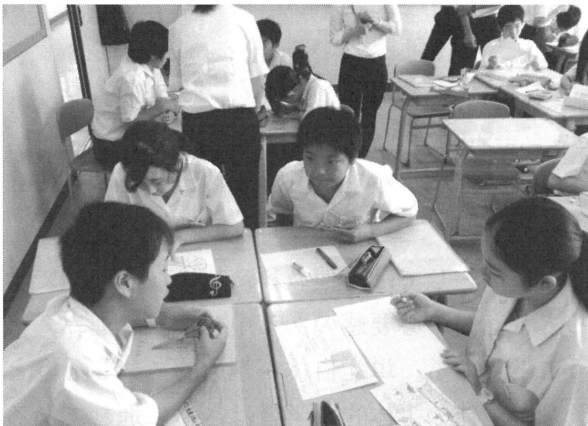


図5：班で一人一人が資料を作成している場面
資料を作りながらも、どのような主張に向かっているのかを確認しながら作業を進めている。



図6：班で発表に向けて練習をしている場面
資料と資料のつながりや、作成した意図をお互いに質問しながら、どんな発表をするのか考えている。

(3) 発表をふりかえり、さらに問いをつなげていくための手立て

ポスターセッションは、1対1のこともあり話し手対聞き手が、接近しお互いに質疑応答を繰り返しながら、思考を深めていく発表形式である。同じだけの知識や考え、価値観をもっているもの同士だからこそ議論が深まり、さらに思考が深まっていく。しかし、中学生の段階でお互いが同じ知識の量をもっている話題は非常に少ない。本来のポスターセッションとは少しかけはなれているが、小学校で学習したポスターを使った発表を受けてさらに進めるものとして今回の発表活動

は、有意義な活動だと考えた。生徒の実態、これからの授業展開を考え、本単元では発表することだけでなく質疑応答の活性化をはかる必要があると考えた。そこで、質問がでるための手立てとして、以下を行った。

- ① 質問には、必ず答えること。その場で答えられないことでも、後で回答すること。
- ② 聞き手が事前にポスター見て、付箋に質問を書き準備をし必ず質問をすること。
- ③ ポスターの発表テーマを一覧にし、聞きたい発表を第3希望まで取ること。
- ④ なるべく、希望に沿って聞けるようにすること。
- ⑤ クラスの友達の見点だけでなく、研究授業参加者に聞き手として授業に入ってもらい、違った視点から質問をしてもらうこと。

他の班の友達や、参加者の方が聞き手として発表を聞き、必ず質問されるということから話し手として発表内容をさらに吟味していこうとする必要感が増し、積極的な話し合い活動が進んでいった。また、聞き手が発表内容について聞くということはつまり話し手の発表内容や話し方にわからないことがあったり、興味を惹かれたことがあったりしたからであり、その質問や意見と出会うことによって、聞き手の直接の反応が分かり、自らの話し手として課題や成果をより認知できるものとなり、次の発表活動へとつながるものとなった。この姿が、本校国語科が今までの研究から大切なことと見出した、「伝わるだけでなく、伝わらなかった経験にも価値を見出すこと」ではないかと考えている。

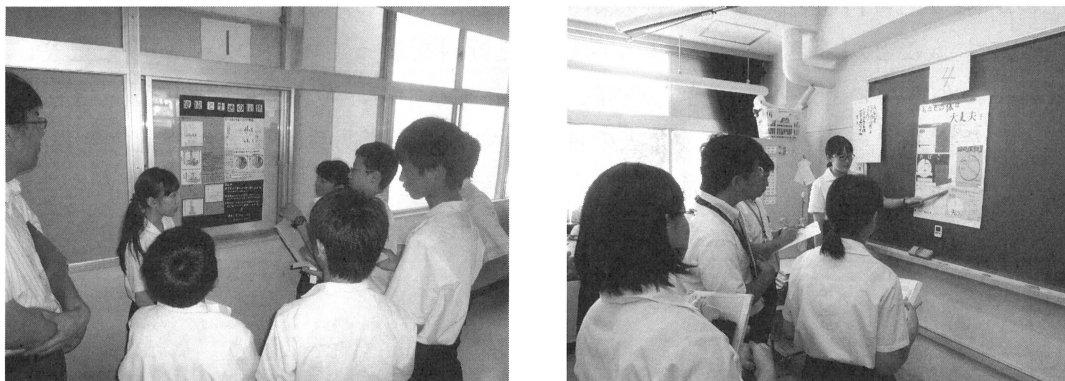


図7：実際のポスターセッションの様子

5 終わりに

本単元を振り返ってみると、成果と課題が両方ある。成果としては、他教科、他領域と共同で学習していくことで、生徒の目的意識や相手意識がはっきりとし、必要感のある中で学習が進み、そのことが生徒の単元を貫く学習の原動力となるということである。単元自体が魅力的で楽しそうということにプラスして必要感を持たせることができれば、生徒の主体的な学習はさらに進むであろう。また、国語科の学習で何を学ぶのか、どういう力が授業で付くのか授業者と生徒で共有することができた。そのことで、支援の方向性が自然と見えてきた。また、伝わらない経験も、生徒にとって問いをもったり、次の学習意欲をもったりと次に向けてすごく大切な経験だということがさらに実感できた。伝わった経験だけでなく伝わらない経験を自らの学びに生かせるということをしかりと生徒に伝えていきたいと思う。

課題としては、発表形式のポスターセッションを、実社会で行われる形で授業として成り立たせるためにどういう形であれば良いかを考える必要がある。学年が上がるごとに実社会で使われる形では発表活動を行うことが重要になってくると思う。どの発表活動においても、授業の中に取り入れていくことができるようにこれから考えていきたいと思う。 (文責 鳥屋尾 慎人)